

註は出来るだけ簡單にした。本書をよむのに、また理解するのに役立つ程度のものに止めた。翻譯書としてなるべくは原書をそのままに再現したかつたからである。

なほ註と斷つてあるものは勿論であるが、括弧内のものはすべて譯者の老婆心である。これは單に理解を助ける意味で付したにすぎない。括弧をとばして讀んで頂いて結構である。

翻譯にはいろいろな態度があるかも知れない。文章の構造を理解するための獨和對譯の場合、文學物、とくに詩歌などを譯す場合など、それ／＼立場が異るとおもふ。しかし本翻譯に於ては、「原文の内容を日本語として解らす」といふ點に最も重點を置いた。この種の翻譯にはこの點が何より一番重要であると考へたからである。

非常に日本語にしにくい獨逸語であつた。たゞひたすら意味の取違へのないやうに努めたつもりである。

諸彦の御叱正をまつて、よりよい翻譯としての他日の完成を期してゐる次第である。

譯出にあつて種々語學上の御教示をたまはつた日獨文化協會主事へアベルト・ツァヘルト博士に深甚の謝意を捧げる。

さらに本書は畏友村上信彦君の異常な情熱と努力がなかつたならば完成を見なかつたに違ひない。村上君は譯文を全部通讀し、いや熱讀玩味し、あらゆる點で忠言、助言を惜まず、或ひは駄目を押し、或ひは私と議論を戦はし、あるときは私がもう一度原文を譯し説明し、その結果を共に考へ、共に主張するなど、譯文推稿に盡された御厚意は永久に忘れ難いものがある。また装幀も村上君にお願ひした。此處に記して厚く感謝する次第である。

昭和十七年四月

譯者

## 追記

本書は全譯と銘うち、また事實上全部を譯了したのであるが、原書二五八頁より二六一頁までと、三〇三頁より三〇五頁に互る箇所は、國情の相違から私自身としても到

底紹介し得ないものであり、かつ本邦とは全然無關係、また参考にもなり得ないものであるのを削除した。

第二に原書三一七頁より三二八頁までに至る箇所の一部は、大東亞戰下にあつてある敵性國家がヒトラーの眞意を曲解し逆用して、日獨離間策の宣傳文書として公布したところを含んでゐる。敵の逆宣傳に用ひたところを此處に譯出して敵性國家をしてまた利用せしめることは、私としてやはり出来なかつた。同所はヒトラーが獨逸國民を奮起さす目的で、いはゞ「テクニク」として書いた論旨であるが、如上の理由から——また前後の關係上少しく大きく——削除した。

此の點讀者の御諒解を乞ふ次第である。

本書が「吾が鬭争」の註釋書であり、研究書であるならば、或ひは充分意を盡して説明し、誤解を避けつゝ評釋も出来るのであるが、單なる譯書としての性質に鑑み、また研究書は他にも存在する點を考慮して、譯書としての譯出は差控へた次第である。

猶削除箇所に於ても第一版以來最新版に至るまで訂正加筆された所はない。たゞ二、三の語をそれと同義の他の語に変更したところがあるにすぎない。

## 序

一九二四年四月一日、余は同日附ミュンヘン人民裁判所の判決に依り、レヒ河畔ランツベルクの要塞禁錮の刑に就かねばならなかつた。

かくて余には、不斷の勞苦數年にして、はじめて、多方面よりの要求も多く、且つ余自身の感じから言つても運動に役立つと思はれてゐた著作に着手する可能性が與へられた。かくて余は上下兩卷に於て、吾等が運動の目標を明かにするのみならず、運動發展の様相をも亦記さうと決心した。その方が、純然たる理論一點張りの論文などよりも得る所が多いであらう。

更に此の機會に、余自身の生ひ立ちも、上卷及び下卷の理解に必要な限り、また余自身に關して猶太新聞がつくり上げた悪質の作り哂を粉碎するに役立つ限りに於て、述べて置いた。

此處で余が本書の對象とするものは、心から此の運動に加入し、且つ其の知性上更に眞摯な教示を求めてゐる運動信奉者であつて、局外者ではない。

人を獲得するのは書かれた言葉ではなくして、話された言葉に依るものであり、此の世に於ける偉大な運動は何れも、偉大なる文筆の士に依つてではなく、偉大なる雄辯家に依つて伸びて行く。